

スイスの高級時計

あるスイスの高級時計メーカーのオーナーの心に残るインタビューです。

ライバルは？という質問に、これというライバルはないが、イタリアのブルガリやフランスのカルティエ、アメリカのティファニーなどの高級ジュエリーはいつも注目しています。

それでは、日本のセイコーやシチズンなどはどうですか？時計マーケットを制圧する勢いですが、以前は強力なライバルと想っていました。危機感もありました。

日本の企業は大量の資金を投入して、価格も押さえ、マーケティングを飛躍的に拡大させました。今や日本は生産量や額では世界一でしょう。

しかし、機械としての時計も重要だが、我々はそれ以上にジュエリーを自指して作ってきました。我々の時計は芸術であり、ファッション商品なんです。だから価格に関係なく、いいものを求められています。

これには熟練した技術者とすぐれたクリエーターがいて初めて可能なことですが、同じ物を大量に生産する必要はありません。また近代的な設備の大工場だから出来るものでもありません。だから大企業である必要は全くありません。

我々はこれからも小規模だが世界に誇れる時計を作っていきます。

ある経済誌が「かつての時計王国、スイスは」という書き方をしていました。それは生産量や売上額という物差しで計っているからでしょう。ある面では正しいが、何か違う物差しとデータで答えを出してしまっって、一番大事なポイントを見誤っているのではないのでしょうか？

以前、オーストリアの知人に、日本やアメリカでは会社が大きいか売上が大きいか、なぜそ



んなに評価が高いの？と質問され、そんな質問をされたことに戸惑ったことがあります。

それまでは、理屈抜きで大企業がいいと思っ込んでいました。

なぜ大企業はいいんですか？と改めて問われても明快な答えは出てきません。

日本ではいろんなランキングを目にします。売上、マーケットシェア、会社規模、社員数等々。社会の教科書などはランキングのオンパレードです。面積の大きい国、人口、GDP、等々。

これを幼い頃から見続け、聞かされ続けていると、動物学的すり込み現象で、いつの間にかランクは上が素晴らしい事、目標のような潜在意識が植え付けられてしまっているようです。

*****覚えておくと便利ニット豆辞典*****

カシミヤは 西蔵のヒルの子

編み上がったばかりのカシミヤの毛糸や糸を見ても、初めての人にはこれがあんなふんわりと柔らかいカシミヤとは思えないと思います。カシミヤは編み上げれば「出来上がり！」という具合にはいかないんです。

編み上がったセーターは刺青糸(しゅくじゅう)をします。カシミヤにとっては縮絨は大変重要な作業です。

これは乱暴に洗ってしまうと、セーターを洗ってやるんです。もちろん水だけではありませんが、高度な技術と熟練が必要なんです。洗って糸の間を水が通ることによって紡がれている産毛を表面に立てるんです。これを仕上げして乾かしてやっとなんかふんわりしたカシミヤになるんです。縮絨の結果で風合が全くと違ってくるんです。

このようにカシミヤは微妙で、不思議で、楽しい世界です。

水谷のみ話

ニット屋になる前は海外旅行の添乗員でした。チャンスがあったら是非お書き

緑溢れる

英国のカントリーサイド

バブは喧騒の中

時間に制約された中での海外旅行。移動といえはもっぱら飛行機ですね。

ヨーロッパの中では、国際特急列車(TEE)や縦横に発達した高速道路を使っっての移動も大変有効な手段ですが、やっぱり飛行機が移動の主役。でも一っ飛びしたり、高速で通り過ぎてしまうには、あまりにももったいないのがヨーロッパの田舎です。



ドイツのバイエルン、スイスやチロル、南フランス、イタリアのトスカナ、デンマークの北海に面した村など、ヨーロッパの田舎は大都会の魅力に優るとも劣りません。

そんな中から今回は英国の田舎。気取って英国のカントリーサイドです。

イギリスの田舎をのんびりドライブすることは、たんなる移動の手段ではなく、立派な旅の目的の一つになると思います。

大都会や名所旧跡などは教科書やガイドブック、マスコミ等から多くの情報が得られ、それなりの予備知識や期待を持ちながら接するので、ある程度の気構えがあるんですが、情報の少ない田舎は実際訪れるまでなかなか解らないものです。

私の場合は初めて訪れたロンドンより、初めてのイギリスの田舎の方がずっと印象的でカルチャーショックがありました。

『物』の豊かさや利便性という面では、日本のほうが進んでいると思いますが、『心のゆとり』という『豊かに暮らす』と書こう事に対する考え方にかなりの隔たりがあるように思います。

この頃は「EBS」をはじめ、英国式庭園や植物を主体にしたガーデン誌が人気があるようですが、英国人は植物の緑で地面を覆い尽くさないと気が済まない国民性なのか、サッカーやラグビーのグラウンドはもちろん、ほんの小さな空き地まで芝を植え手入れして、慈しんでいるのが伝わってきます。

また建物も緑に最も調和するように建てられているような気がします。この緑の多さこそが『英国の田舎は世界一』と言われる所以だと思います。

ニットの仕事で訪れたノッチンガムやドンカスターの郊外の村も、典型的な美しい英国の田舎でした。緑の牧場にオーク・ツリーと呼ばれる、樫の大木が点々と陰を落とし、羊が草をはむ風景や、緑の生け垣に囲まれた庭には花が溢れる美しい村がいたるところにみられます。

出来たら半年ぐらいここに住人になってみたいような村です。

伝統的なハイゲージニットで有名な会社や工場、シックな建物も、手入れの行き届いた花壇にか囲まれ、この環境にびったりと調和しています。

そんな静かな田舎でも夕方のバブは人で一杯です。人と接する機会が少ない閑静な住宅の住人達が、人恋しくて会話を求めてやってくるのでしょか。

ワイワイ、ガヤガヤ、すごい喧騒です。

こんな所で地域のコミュニティが作られてくるのかと、英国の田舎の社会を垣間見たような気がします。

こんな静かな田舎では、狭くて騒々しいバブが彼等のリゾートなのかも知れません。

うと

